

くさぶえの家 通信

30周年記念号

令和2年3月27日発行 第26号

川崎市くさぶえの家

川崎市高津区末長3-25-8



発行人:永井 岳治

編集人:近藤 順也



川崎市くさぶえの家

30周年にあたり

社会福祉法人川崎市社会福祉事業団

理事長 成田 哲夫

利用者、ご家族等、関係機関の皆様には日頃より、くさぶえの家の運営について、ご理解とご協力をいただきありがとうございます。

くさぶえの家は、様々な行動障害のある自閉症の方々が地域で自立した生活が出来るよう、平成元年7月の開設以来、作業支援や生活支援に取り組み、今年度で30周年を迎えることとなりました。

また、この間、環境の変化等の理由で日常生活リズムに課題のある自閉症の方が、安定した日常生活を獲得していただけるための相談及び助言等をはじめ、就労先や所属機関での卒園者へのアフターケア、自閉症や発達障害に関する図書の貸し出しや講座の開催などを行ってまいりました。

川崎市は、現在、誰もが住み慣れた地域や自らが望む場で安心して暮らし続けることができる地域の実現のため、地域包括ケアシステムの構築をめざすとともに、本年開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、人々の意識や社会環境のバリアを取り除き誰もが社会参加できる環境の創出をめざしています。

当法人としても、こうした大きな取組みと歩調を合わせながら、ご利用者様に満足していただけるサービス提供に努めるとともに、社会福祉の発展や地域貢献に取り組んでまいりますので、引き続きご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



くさぶえの家

創立30周年に寄せて



川崎市健康福祉局長

北 篤彦

川崎市くさぶえの家が設立30周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

貴事業所は、平成元年に、主に自閉症の方を対象とした知的障害者の通所施設として設立されました。

この間、平成18年の障害者自立支援法の施行や指定管理者制度の導入などといった、様々な貴事業所をとりまく動きがありましたが、様々な障害特性がある自閉症者の気持ちを察し、寄り添いの姿勢で日々の生活を支援してこられたこと、また、併設の「くさぶえ地域相談支援センター」においては、自閉症者への支援の実績を活かし、障害者の地域における自立生活の支援を行うなど、本市の障害者福祉の推進に貢献されてこられたことに感謝の意を表します。

また、合築の「川崎市末長こども文化センター」との施設合同祭りなどを通じて、地域との交流についても積極的に行ってこられたことや、くさぶえ文庫開放事業や自閉症実践療育講座を通じ、地域の方々や関係者の方々に対しても、自閉症児者に関する障害理解、普及啓発を熱心に行ってこられたことにつきましても、改めて深く敬意を表します。

川崎市におきましては、障害者施策における基本計画である「かわさきノーマライゼーションプラン」において、「障害のある人もない人も、お互いを尊重しながら共に支えあう、自立と共生の地域社会の実現」を基本理念として施策を進めており、施策の推進のためには、市民、地域、事業者、団体が連携して取り組んでいくことが重要でございますので、貴事業所におかれましても、今後とも、現在行われております取組をより一層推進していただき、御協力をお願いいたします。

結びとなりますが、川崎市くさぶえの家が今後も本市の障害者福祉の発展のために大きな役割を担いながら、ますますの発展を続けられますことを祈念いたしました、お祝いの言葉とさせていただきます。



自閉症の人々と高齢期問題

医療法人弘徳会愛光病院
顧問 山崎 晃資

「川崎市くさぶえの家」の創立 30 周年、まことにおめでとうございます。

私は、当事業所の創立以来、精神科相談を担当しており、さまざまな事例や出来事を経験してきました。

平成 23 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分に東日本大震災が起きた時には、精神科相談を行っていた最中でした。これまで経験したことがない大きな揺れで、立っていることも困難でした。揺れがおさまった時に、作業中の利用者に声かけをして道路に出ることになりました。その日は 30 人ほどの利用者が作業をしていましたが、再度、大きな揺れが来たときには、路上に座り込んで泣き出す人、真っ青になってスタッフにしがみつく人、呆然と立ちすくむ人、いつものようにニコニコ笑っている人など、さまざまな反応の仕方でした。大地震が起きた時に自閉症の人々がどのように行動するのかを間近に見たのは初めての経験でした。日本自閉症協会は、種々の調査を行い、「2011.3.11 東日本大震災を受けて：自閉症の人たちのための防災・支援ハンドブックー支援する方へー」を平成 24 年 3 月に発行しました。

最近気になるのは、親の高齢化の問題です。知的障害を伴う自閉スペクトラム症の A さん(55 歳、男性)は 88 歳の父親と二人暮らしをしており、養護学校高等部卒業後、くさぶえの家に通っていました。夜間に無断外出してかなり遠くの交番で保護されることがしばしばあり、何かのことで父親に厳しく叱られると家具に当たることがありました。年齢と共に父親の体力と判断力が衰えてきた頃、父親に入所施設の利用を勧めましたが A さんを手放すことに、なかなか決断がつきませんでした。父親に認知症の発症が疑われるようになりました。くさぶえの家の職員、A さんのきょうだい、さらに地域の福祉関係者と相談して A さんの施設入所と父親の入院を検討し始めました。会うたびに A さんの最近のエピソードや地域の人々との交流を楽しそうに話していた子煩悩で磊落な父親でしたが、A さんのことが常に重荷になっており、まわりの人々には図り難いストレスであったのでしょうか。親の子どもへの思いと絆の強さを感じるものがしばしばあります。

私が自閉症をはじめとする発達障害の人々とかかわり始めて約半世紀が過ぎました。継続的にかかわり続けてきた人々の中の最年長者は 65 歳となり、施設で暮らしている人々も少なくありません。最近問題になってきているのは、親の高齢化と「親亡き後」の問題と共に、自閉症の人々が認知症を発症した時に、どのように診断し、どのように対応することができるのかということです。発達歴・生活歴、家族構成、家族力動などを慎重に見直して行動の評価を行い、時には成年後見制度の利用も考えなければなりません。発達障害を専門に診ている精神科医は未だに少なく、老年期まで継続的にかかわっている人はもっと少ないのが現状です。老年精神医学を専門にしている医師には発達障害の人々とかかわりがほとんどありません。この 2 つの領域の連携を早急に行う必要性が増してきています。高齢期医療問題は、発達障害の人々と家族にとって喫緊の課題となってきています。発達障害と認知症の発症の関連性を念頭においた、新たなかかわりが求められています。

設立30周年に寄せて

療育指導相談員
片倉 厚子

くさぶえの家開設30年おめでとうございます。

昨年行われたワールドカップラグビー日本大会は、日本代表チームがベスト8に進出する快挙を成し遂げました。流行語大賞にも選ばれましたが、快進撃の裏にONE TEAMという言葉があります。

くさぶえの家の職員は利用者ひとりひとりに常にアンテナを張っています。問題行動には必ず前駆症状が見られ、いち早く前駆症状に気づき声かけ等対応をし、不適応行動に繋がらぬよう気をつけています。前駆症状を感じた職員はその場にいる他の職員にサインを送ることもありますし、前駆症状に気づいた職員を察し、他の職員が動く場合もあります。正にONE TEAM。基本の基に忠実に、そして後手対応にならぬよう、的確な判断を素早くし対応する。これは草創期から試行錯誤を繰り返し、職員が入れ替わる中でも変わらず受け継がれてきたことです。その背景には彼らを特別な人たちとして一括りにせず、安心安全に生きがいを持って暮らして欲しいという思いがあります。原因を彼らの中から探し、彼らの責任にするのでは無く、自分たちの対応を常に振り返って行くことが大切だといつも話しています。

30年という月日の中で、社会状況の変化は確かにあります。だからと言って、出来ないことの理由を探すのでは無く、どうやったら出来るのか？それをとことん考え尽くしていくことが私たちの仕事だと思います。

パニックもこだわりも常同行動も自傷・他害・飛び出し・固まり・多動なども特別な状態での哺乳類としての人間の行動である。平常状態の人間的な行動ではない。まして、その人の個性が反映されているその人らしい行動ではサラサラない。すべてをゼロにすること、しないで暮らせること、それをまず実現するのがプロの心得である。

2009年学苑社・僕の大好きな自閉症より

初代くさぶえの家スーパーバイザーであった片倉信夫が最後に出した著書に残した言葉を今一度噛みしめ、次の世代を担ってくれる人たちに彼らと関わる上で必須の技術と心意気は継承していきたいと思います。

(有) かくたつグループ 代表取締役
様々な問題を抱えた親子(会員制)に対し、それぞれのニーズに合わせて相談や訓練を会社組織で行っている。形態は月一回関東近県の各所に出向いて、個別やグループで学習、運動、作業指導などを行う、言わば、【プロの指導宅配業】。会員に年齢制限は無く、現在学齢前から40代の方、約100名が会員登録されている。また、対応が難しいとされる方たちへの接し方や行動改善の方法などを、作業所や施設の支援員に、研修を通してアドバイスをを行っている。



川崎市くさぶえの家ができるまで

川崎市自閉症協会
前会長 増田 直子

川崎市自閉症児者親の会(くさぶえの会)は、昭和54年から自閉症の子どもが学校に入学出来ず、療育に困った親たちが集まり活動を始めました。

以後、川崎市よりいくつかの委託事業を実施しましたが、昭和61年より市の委託事業として自閉症児者福祉対策パイロット事業を実施することになり、地域作業所「くさぶえの家」を開設しました。「末長こども文化センター」の2階です。昭和62年の卒業生4名、指導員2名(男女各1名)施設長1名でスタートしました。

木工の仕事から始めてみましたが、こじんまりした場所のせいか、皆意外に落ち着いて問題行動もなく過ごしました。次に電線の解体をすることになり、一見難しそうに見える仕事でしたが、解りやすかったのか、達成感が感じられたのか、仕事に熱中する姿が見られました。解りやすく利用したタイマーやカウンターのお陰か、数の概念が掴めたり、お金に興味のなかった人たちが、お給料の日に(週給払い)印鑑を忘れず持って来るようになったりと、少しずつながら嬉しい変化も見られ、張り合いを持って過ごせる場所がほしいとの当初の願いが少しは叶えられるように思われました。2年目には前年に続き、養護学校高等部3年生が10名ずつ実習に来て、前回同様実習生には好評を得ました。仕事の量も増え、作業収益が多くなり、かなりな額の給料が払えるようになりました。

木造だった子ども文化センターが鉄筋に改築され、地域の皆様のご理解を得て、平成元年7月に川崎市社会福祉事業団の運営する自閉症者の通所更生施設「川崎市くさぶえの家」が設立されました。

東海大学精神科 山崎 晃資教授と療育の専門家 片倉 信夫先生をスーパーバイザーとしてお迎えできることにもなりました。その頃は自閉症という知的障害を伴うと思われていましたがその後、知的障害を伴わない人もたくさんいて、対応はますます難しくなっています。川崎市くさぶえの家がそのような人たちのための、力強い存在であり続けてほしいと心から願っています。



創立30周年に寄せて

家族会 会長
高梨 美根子

創立30周年おめでとうございます。これまでの道のりに心から敬意を表します。

息子は平成3年に入所しましたが、開所からまだ間もなくの頃だったのです。当時はそこまで考える余裕がありませんでしたが、年月は早いですね。前年に2回の体験実習をさせていただきましたが、あの頃は混乱期の真っ只中で「こじかない！」との思いで入所をお願いしました。通行人を突発的に突き飛ばす他害行為があり、身体を張って止めていた時期で「育て方が悪かったのか」と悩みました、一方で「逃げることはできない！」と覚悟も決めていました。養護学校の先生からは「入ったらもっとひどくなる」と言われ「ダメだったら考えます！」と啖呵を切ったことを思い出します。

息子は偏食が強く、在学中は給食が食べないので、帰宅後に好きな物を与えていました。先生と一緒に実習の見学に行った日の昼食がそれまで食べさせたことがない冷やし中華で、案の定箸の進みが遅かったのですが、支援員が根気強く付き添ってください、1時間半を要しましたが完食しました。今では「あの時は何だったの？」と思えるくらい何でも食べられるようになりましたが、あの冷やし中華のきっかけがなければ今も偏食は続いていたでしょう。送迎バスから下車し、私の運転する車に乗り、発車した途端に他害行為があり、悪戦苦闘していると送迎バスが舞い戻り対応に入ってくれたことや、

下車を拒み私の説得を聞いてくれない時も対応に入ってください、2～3の声掛けで動き出した時は毅然とした態度が息子を動かすと気付かせてもらいました。

8年前に行動援護の利用を思う日がありましたが、外出時の行動から諦めていました。「試しに利用してみてもは？」と言われ、いざ始めてみたらヘルパーさんとコミュニケーションが取りながら外出しています。順調に利用が続き、この事業所がグループホームを立ち上げる計画が浮上した時に「いつかは親元を離れるのだ」と決心してお任せし、今に至っています。入居前は息子と自宅近くの公園を散歩していましたが、入居後はひとり散歩になりました。ある日、見ず知らずの方から「最近お兄さん見ないけど元気？」と言われ驚きましたが、私達親子が地域に見守られていたんだと実感するとともに、ひとり散歩にうら寂しさがありましたが、親元を離れ暮らす息子を頼もしく思います。

くさぶえの家はどのような存在？と思った時「入れて良かった」「入所は間違いではなかった」と思います。方針・作業課題などが息子にマッチしていたのでしょう。言葉のない息子に選択性を取り入れてくれるなど、職員の前向きで諦めない気持ちは大きいです。

今のくさぶえの家が40年50年続くことを熱望します。ヘルパー・グループホームを勧められた時は悩み、迷いましたが本人のための良い資源だと思っています。事業所とくさぶえの家との連携が強固なので任せて安心ですし、これからも安心へのお力添えをお願いしたいと思います。



ごあいさつ

川崎市くさぶえの家
園長 永井 岳治

平成元年7月に開所しました川崎市くさぶえの家が川崎市当局、関係機関など多くの方々にご理解・ご協力をいただき、おかげさまで開所30年を迎えることができましたこと、深く感謝を申し上げます。

私は開所時に在籍していた者ではございませんので、当時を語ることはできませんが、今回関係の深い方々からお寄せいただきました原稿を拝読し、また当時を知る諸先輩から経緯を伺い、開所までの苦労の道のりを知るとともに、この末長に根を下ろし、長年事業運営を続けられることができましたのは地域の方々の多大なご支援によるところであり、感謝の念に堪えません。

この30年で福祉施策は障害分野も高齢分野も大きく変貌を遂げました。措置制度から契約制度に、個別支援計画の作成、意思決定支援、指導から支援に、その他もございしますが、ヘルパー利用・グループホームなど社会資源の拡充は目覚ましいものがありました。これらの情勢に乗り遅れることなく事業を進めてまいりましたが、開所当初から取り組んでいた項目があるのは、先見の明があったのだと自負しています。

作業を活動のプログラムに取り入れている事業所は今でこそ普通に見られますが、更生施設であったために「なんで障害者に仕事をさせるのですか」「ここは授産施設ですか」と尋ねられました。年間の指導目標を設定し、3か月毎に目標の見直しをする現在の個別支援計画に近い取り組みも行っていました。

一方で権利擁護、自閉症療育のスキルの向上・継承など、引き続き取り組まなくてはならない事柄があるのも事実です。また障害理解の普及啓発などこれまでのノウハウを還元する貢献も重要視しています。

30年を経て「自閉症＝くさぶえ」と言っていただけの存在となりましたが、今後も利用者のための事業運営と真摯に向き合う療育が使命だと思っています。

時代が平成から令和になりました。この通過点に甘んずることなく、驕ることなく、川崎市における自閉症専門施設のパイオニアとしてこれからも職員一同邁進する所存です。

引き続き、ご指導・ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



名画をコラージュ「見返り美人」利用者合作

賭けてみたい未来

サービス管理責任者
主査 井元 圭子

多くの方々にご理解・ご協力をいただき、おかげさまで開所30年を迎えることができましたこと、深く感謝を申し上げます。私も永井園長同様、開所時に在籍していた者ではございませんので、当時を語ることはできませんが、今30年の歴史の重さをひしひしと感じています。今回は私が着任したころ・・・これからを記させていただきます。

私が着任したときは、措置制度から契約制度の移行期で、支援の考え方が利用者主体となる大きな流れの中にありました。当時の指導目標は、支援者主体の「〇〇ができるようになる」であったり「〇〇を軽減する」など、到底利用者が望む目標でなかったことを申し訳なく思います。行動障害がある方々に対し、その行為だけを封じ込めることだけを考えていた訳ですから、お互いの方向性が一致する訳がありません。今では利用者主体についてミーティングで検討し、これに関連する各種研修にも参加、ほどなくして「できない“から”やらせないではなく、できない“けど”できるように考える」方向に舵を切りました。

パターンを抛り所にする自閉症者の施設にあって、くさぶえの家は社会経験の広がりを目的に多くの行事がありますが、この行事の準備・進行に利用者にも入っていただいて当日を迎えています。予算の都合上、絢爛豪華とはまいませんが手元にある『知恵というコマ』をふんだんに使いスケジュールを終え、いわゆる「混乱・不安」は激減しました。やや遅まきですが『利用者の会』を立ち上げ、行事のほか、給食・作業・環境に至るまで意見をいただけるようになりました。言葉のない方が多数を占めていますが、言葉のある方が代弁者であることに驚かされるとともに、私たちが日ごろ気にも留めない小さなできごとが、彼らにとっては大きな希望や憧れであったことに気づかされました。

今後益々本人主体、意志決定の尊重の考え方が高まっていますが、その考えを汲み取るにはやはり専門的支援技術が不可欠となります。事業を進めて行くスタンスはそのままに、限りある状況の中からのどのように利用者の真意を掴むか、わかりやすさを優先したアプローチを見出してまいります。

ご縁があって川崎市の主催します「強度行動障害支援力向上研修」のファシリテーターを担い、先日今年度分を滞りなく終えました。受講生に自閉症の特性や支援技術をどのようにお伝えするか迷いもありましたが、みなさまの向上心とヤル気に助けられました。専門知識を持つ後進が、着々と育っていることは自閉症療育にとって明るい未来だと思えます。未来は今の延長線上。私はこの未来にかけてみたいと思っております。

次の40年50年へとくさぶえの家は発展と進化を重ねながら存在して行くと思えますが、引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



名画をコラージュ「笛を吹く少年」利用者合作

給食万歳

管理栄養士
五十嵐 希実世

【くさぶえの家の給食】

～人生を豊かにする食 楽しむための食 娯楽としての食～

給食は利用者さんにとって楽しみのひとつです。中でも行事食や会食は、みなさん期待を持ってくださいます。またくさぶえの家では、利用者さんの誕生日に食べたい料理をリクエストしていただく「誕生日メニュー」があります。意見箱に食べたいメニューを書いて投書いただく方法と、食べたいメニューを自ら申し込める機会を大切にしています。

それだけではなく、今年度はこんな今だけ提供できる「特別メニュー」を取り入れてみました。

【ガンバレ日本！オリンピック応援献立】

7月に迫りました「2020東京オリンピック・パラリンピック」。それに因みました様々な国のメニューを取り入れたオリンピック応援献立を、月に一度取り入れて利用者さんたちと共に、オリンピックへの期待を高めています。

月末に発行する給食だよりには、応援献立の国についてのコーナーを入れ、その国のオリンピックでの活躍や食文化について触れています。利用者皆様に伝えると、応援献立を楽しみにしている姿があるようです。

最初に応援献立を実施したのは昨年6月です。イギリスの応援献立を実施いたしました。東京オリンピックで、川崎市がイギリス代表チームの事前キャンプ受け入れのホストタウンを務めることなど、オリンピックの際に一番身近な国であることから選びました。

イギリスには、伝統料理としてフィッシュ&チップスがあり、家庭などで広く食べられています。揚げた白身フライをパンに自分で挟んで食べる、じゃがいもは薄くスライスして揚げますが、パリパリとした食感が楽しめ、利用者さんたちにとっても好評でした。

2月は、春節の時期に因んで中国の応援献立を実施いたしました。世界三大料理のひとつでもある中華料理は、日本でも店舗・メニューが多数あり馴染み深い料理です。春節に必ず食べる食材のひとつ「春巻き」を提供しましたが、普段からの人気あるメニューであったため、利用者さんたちは笑顔で召し上がっていました。

オリンピック直前の7月に予定しているのは、日本の応援献立です。利用者さんが自分で作れる手巻き寿司など和食を予定しており、みんなでオリンピックを迎えられるようにしたいと考えております。

最後となりますが、引き続きくさぶえの家は、職員が連携した施設づくりを進めると共に、ご家族皆様のご意見・ご要望も取り入れ「これからも利用したい」と思って頂けるような事業所にしたいと考えております。

給食が楽しみと思って頂けるような魅力的な献立を提供すると共に、調理実習などもおして食事に関心を持って頂き、専門職として利用者皆様の健康維持のために、少しでもお役に立ちたいと思っています。

【活動写真】



＜ボルトコネクター＞



＜マウント・ベース＞



＜体 操:3月＞



＜宿 泊:11月＞

編集後記

皆様の支えにより、この度開所30年を迎えることが出来ました。今回はその記念号をお送りいたします。

ご多忙の中、ご協力いただきました皆様には心よりお礼を申し上げます。

新しい時代が幕を開けてまもなく1年となります。

ご利用者様が一層充実を感じていただけるよう、これからも提供するサービスの見直しや、新規作業の導入に一同尽力いたします。

引き続き、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

文責…近藤